

漫画

氷野広真

HINO HIROMA

原作

ほーち

キャラクター原案

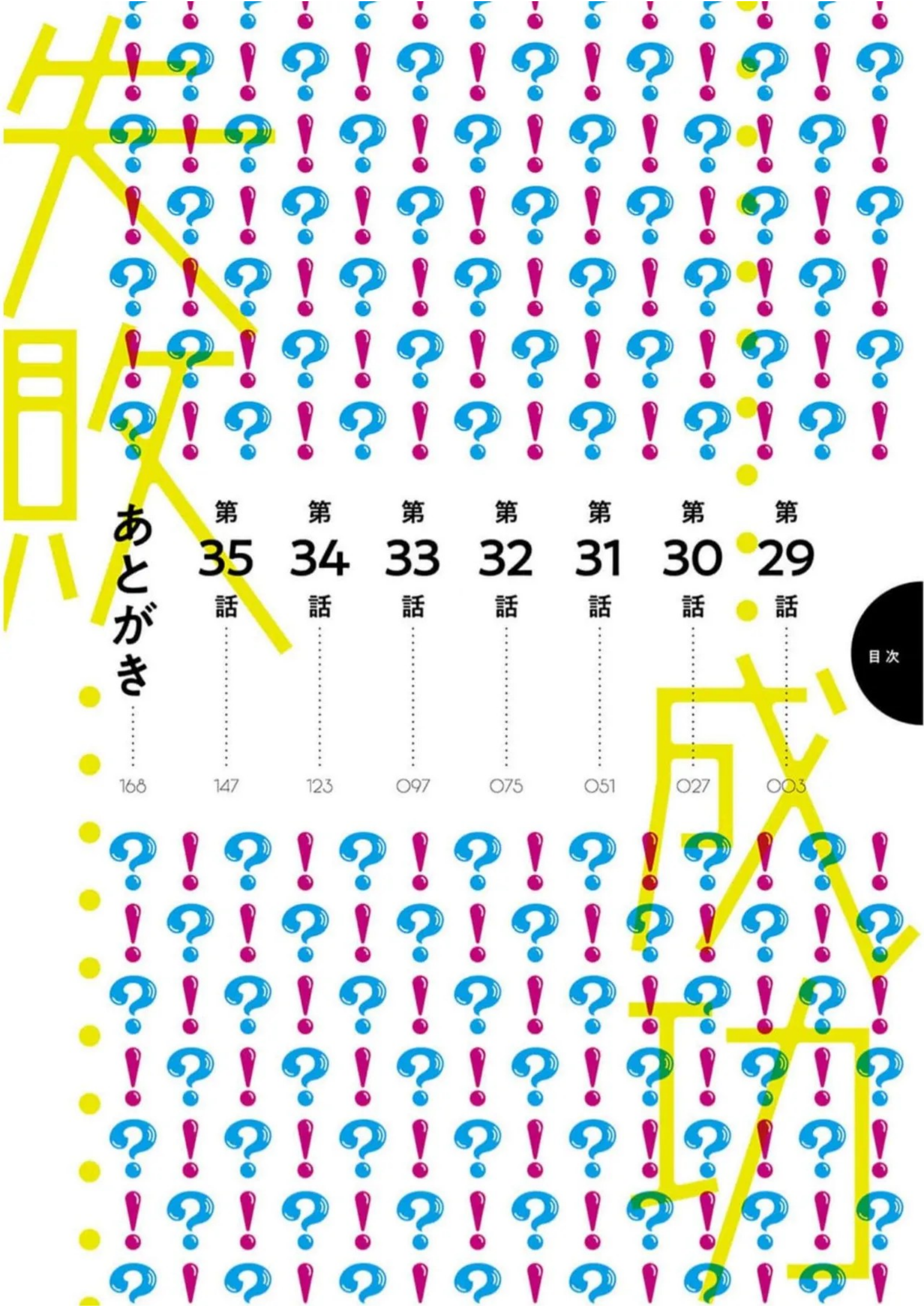
saraki

えっ、

転移失敗!?

.....成功?

5



あとがき

168

第
35
話

147

第
34
話

123

第
33
話

097

第
32
話

075

第
31
話

051

第
30
話

027

第
29
話

003

目次









ふふ...
やっぱそれ
便利よね







あ...

あ...

あー

!!

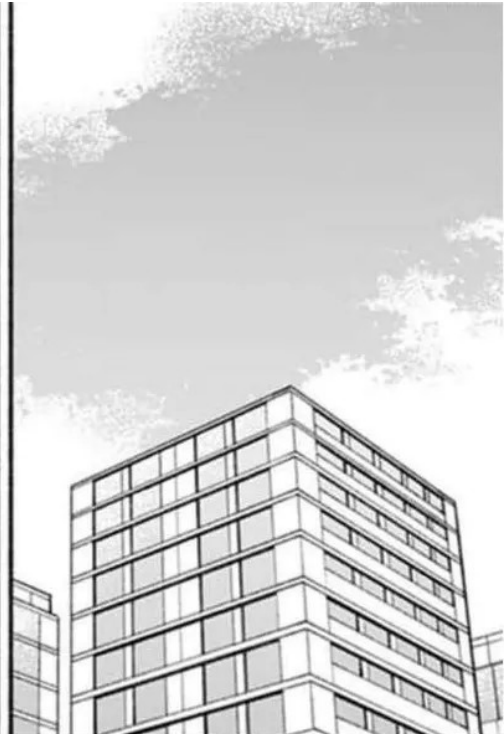
うぐあー!!

!!

!!

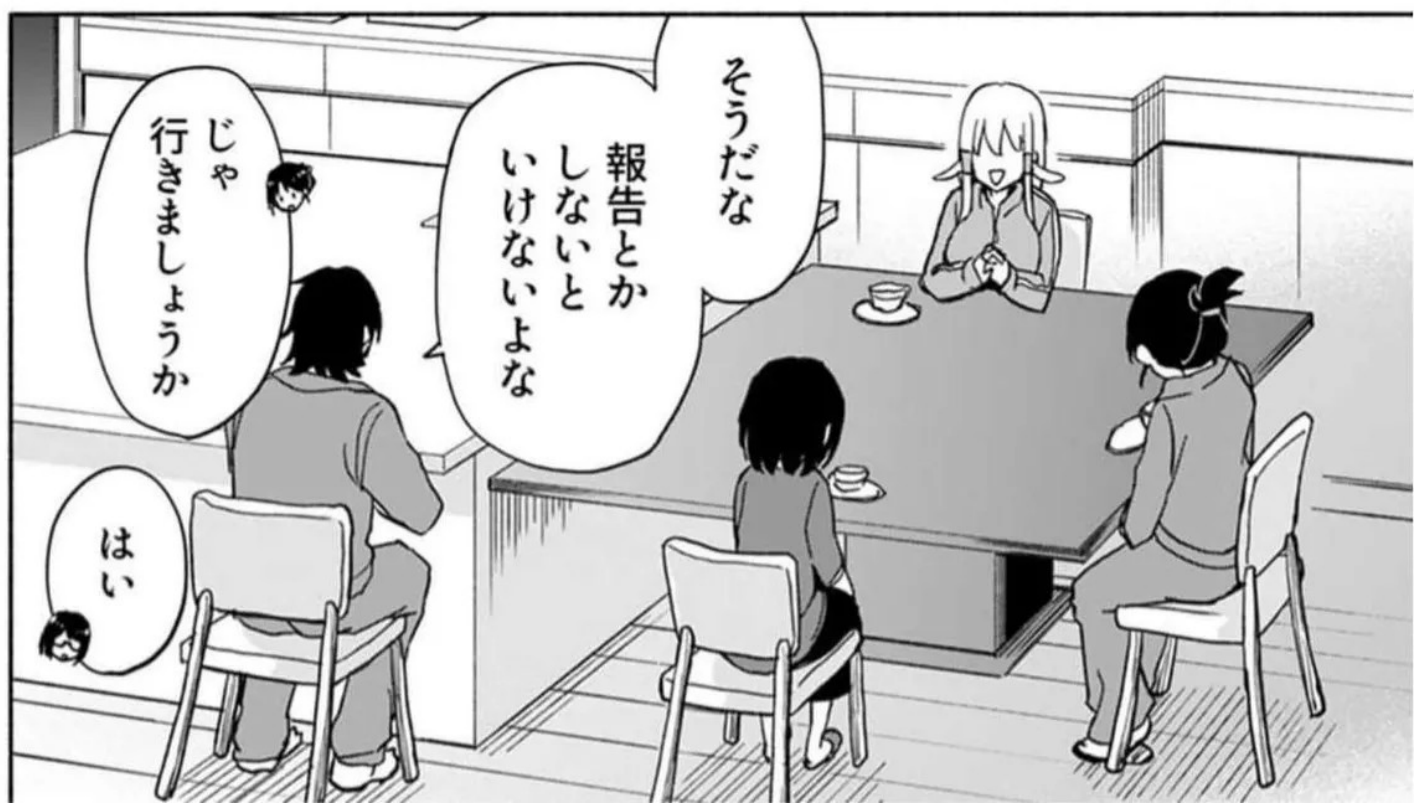


さて



そろそろ
向こうに
戻るとしようか

ヨーイチ殿



そうだな

報告とか
しないとい
けないよな

じゃ
行きましょうか

はい







今回は
よく頑張ってくれた
礼を言う



へ？



いえ…俺は
できることを
しただけで

その
できることとやらが
規格外すぎるがな

おかげで民間人の
被害はなかったよ







いえ



このあいだ言った
訓練の件な

あれ嫌なら
ナシでもいいぞ



ギルドマスターさえ
よければ
稽古をつけてください

——あの時
剣術のひとつでも
覚えていれば
もっと戦えた
かもしれない……





やるからには
手加減など
せんぞ？

望むところ
です

——よし
これがいいか

ゴ
トッ

持ってみろ

はい



このナイフもしかして
アラナーの斧槍と
同じ素材でできてる…!?



スリ
ニ
イ
◇
◇
◇

重ーっ!!



なに?
体外に魔力を
出すことが
できない?

ええまあ…



それを
普通の短剣のように
扱えると
最初の一撃でたいてい
敵の防御を崩せるぞ



では何か
別の術式を…

サムに相談
してみるか…



さらに魔力を流せば
最大10倍まで
重くできる
おもしろいだろう?

とりあえず
基本の型と
素振りの方法だけでも
教えておいてやろう

普通の短剣だ

まずは
逆手で構えて

…そうだ

そして腰を
落として…

ギューッ

…ふむ
構えは
悪くないな



それは
レイピアやサーベルの
戦いかたではないのか？

あ…

わざわざ
リーチの短い武器で
お前の言うような
戦いかたをする意味が
俺にはわからないのだが

勇者の故郷では
そういうのが
はやっているのか？

いえ…

元の世界と違って
こっちには剣という
選択肢があるんだった

短剣というのは
素手の延長くらいで
考えておいた方が
いいだろうな

スッ









FAILURE ? R SUCCESS





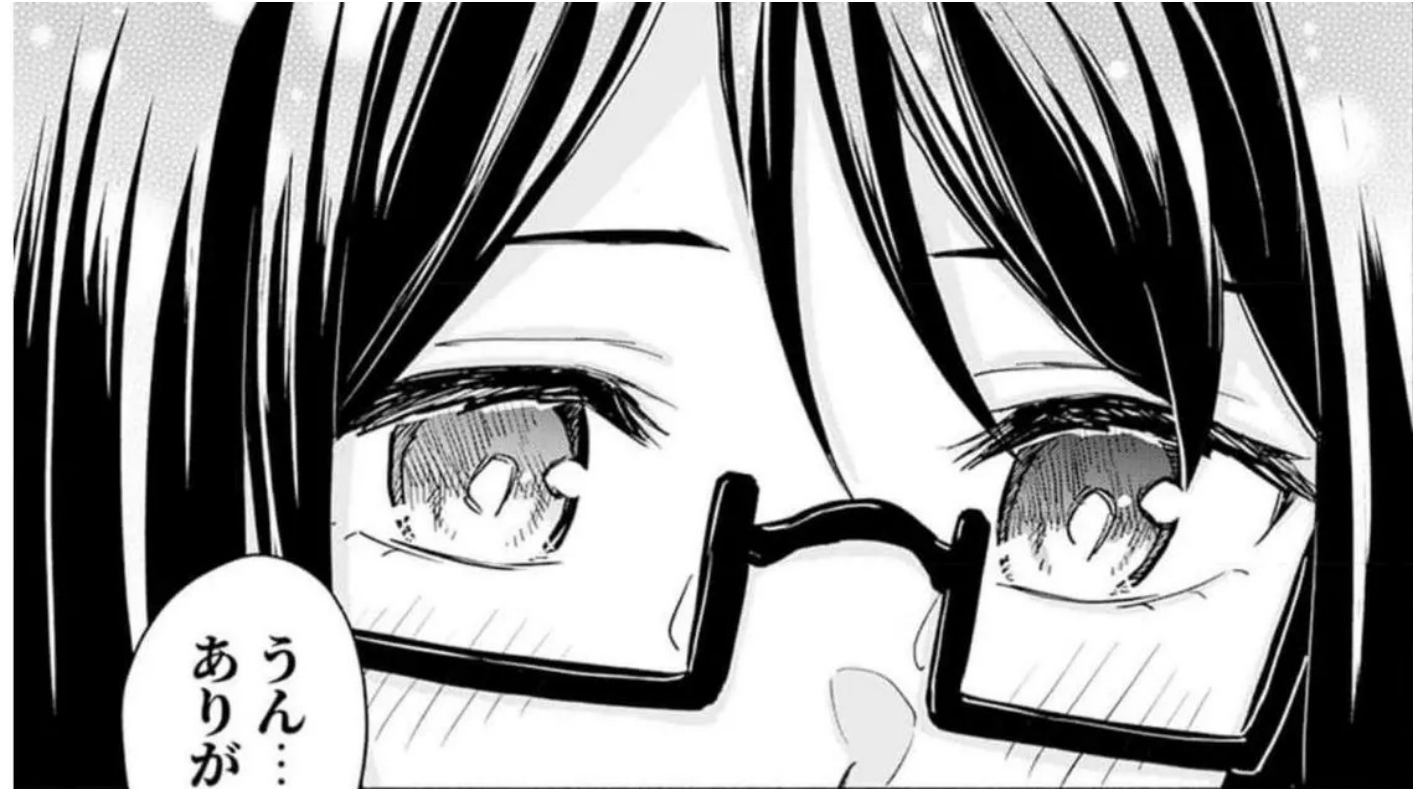








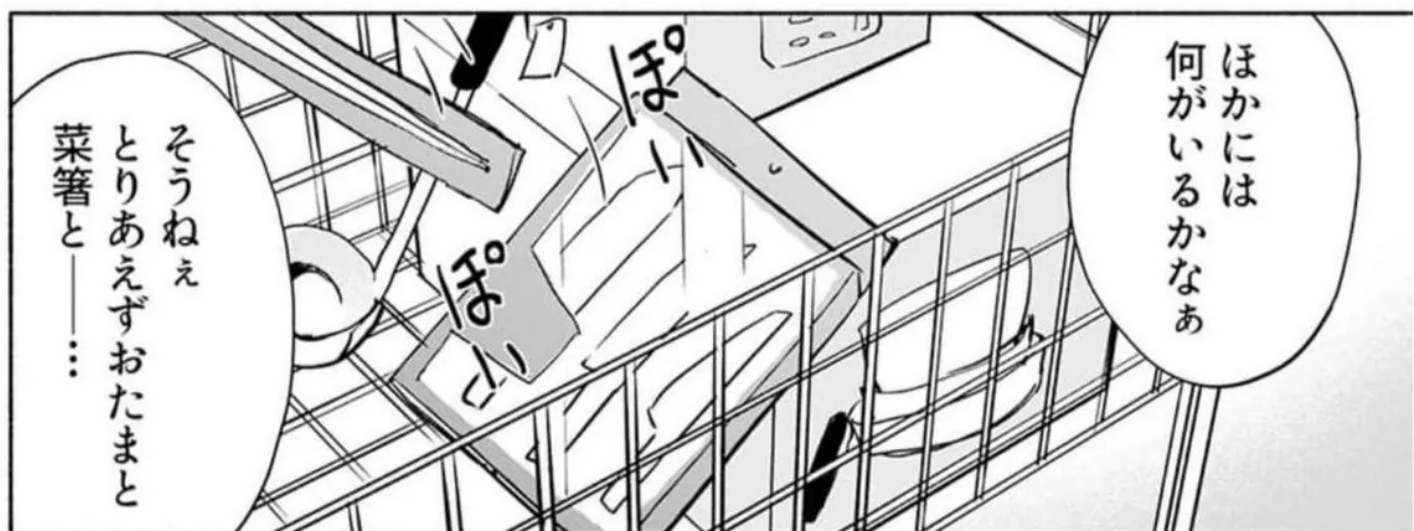




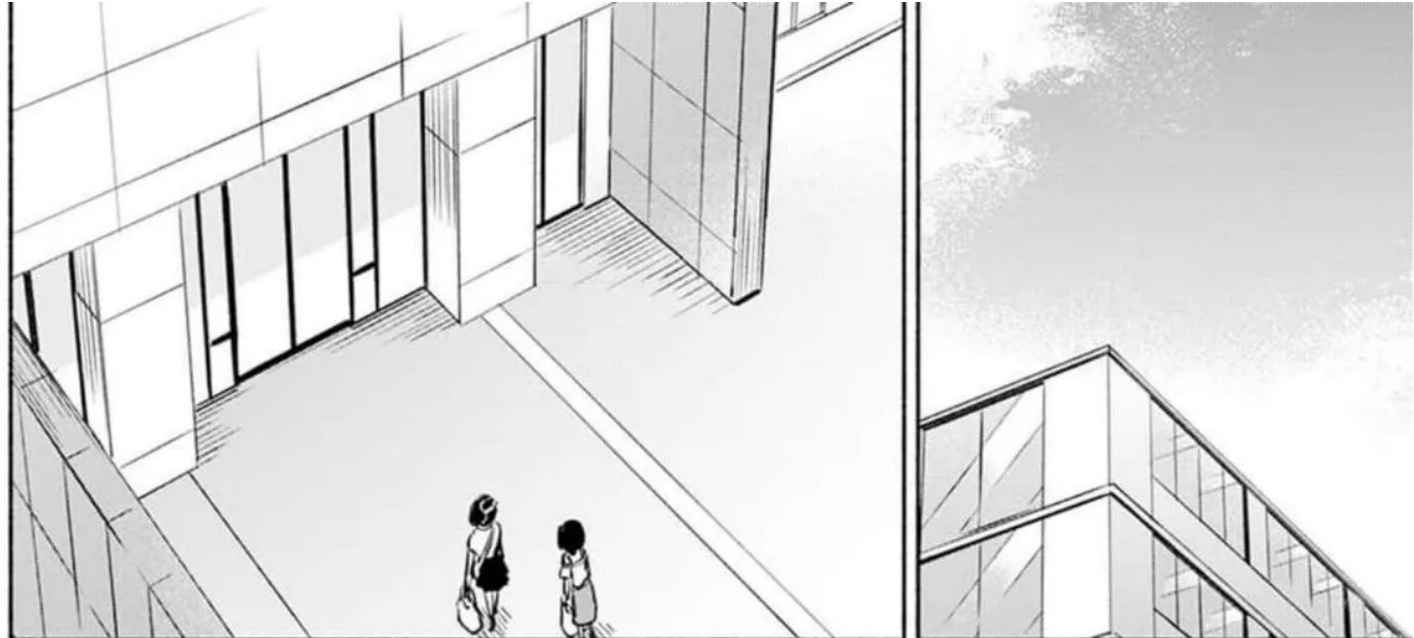
うん：
ありがと



お鍋とフライパンは
取っ手が取れるやつ
のセットにしとき
ましようかね









もうすぐ陽一も
帰ってきそうよね

あいつにも食べて
もらおうとして――

これとか
作ってみよう
と思うんだけど

定番☆肉じゃがレシピ

肉じゃが…

あ…ごめん花梨
私料理なんて
したことなくて…

そっか

手伝えること
あるかどうか…

私には
難しいよ…!! っ

大丈夫よ

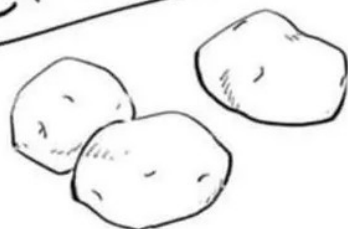
ちゃんと作れば
ちゃんと美味しく
なるから

なんで!?

じゃあ
実里メインで
作って
もらおうかな!

肉じゃが材料

じゃがいも

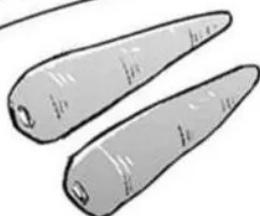


牛肉



う…うん
花梨がそう言うなら…

にんじん



たまねぎ



いんげん



しらたき



しょうゆ



砂糖



みりん



熟練の料理人が
使う必殺技…

初心者でも
できるわよ

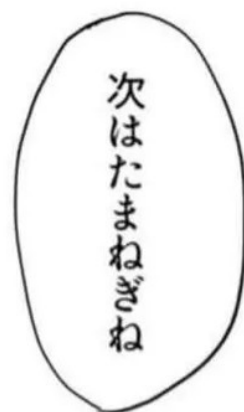
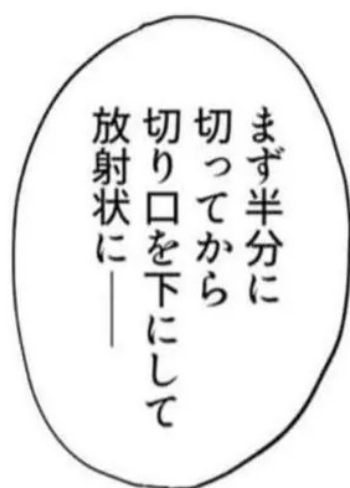
乱…切り…？

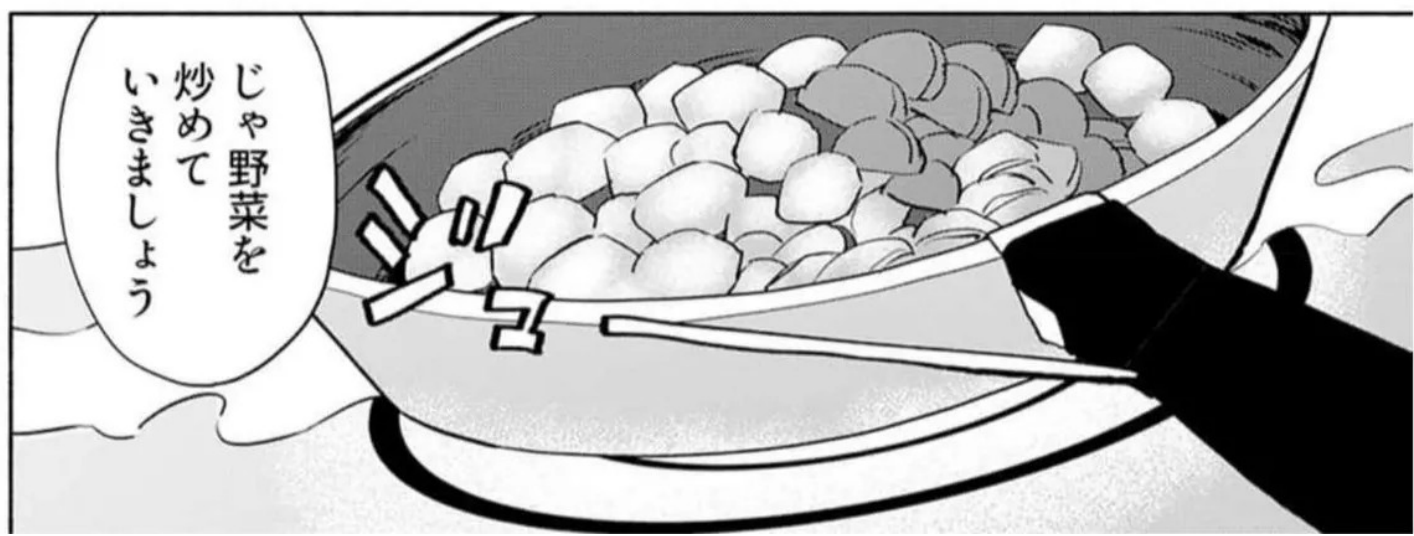


シャリ
シャリ



まずは
じゃがいもとにんじんを
乱切りにしていきましょ

















ごちそうさま

つとごめん
そろそろ行かないと

忙しいわねえ
今は何やってるの？



主に魔物集団暴走で
倒した魔物の
死骸の回収だな

回収？

ギルドマスターが
言うには――

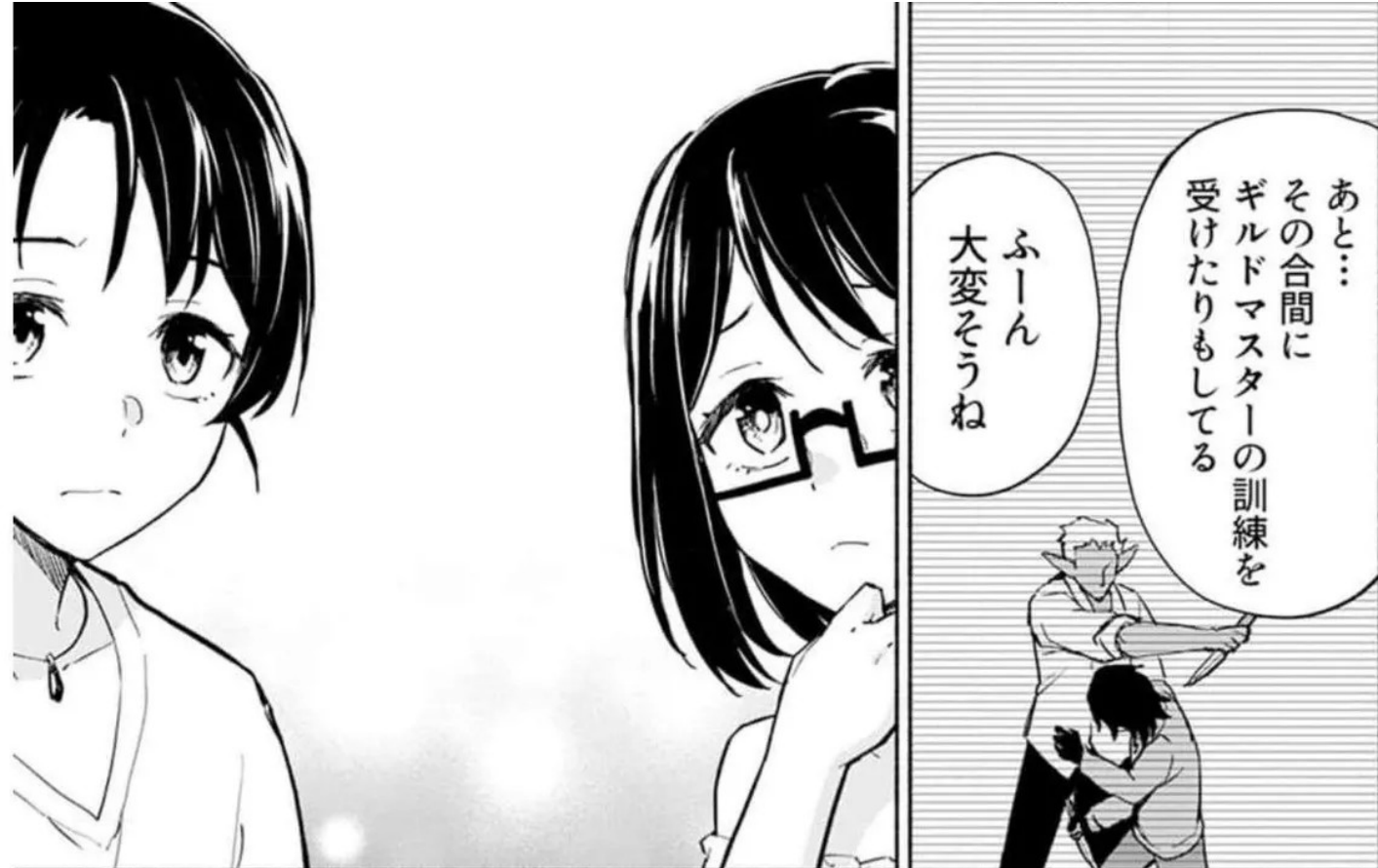
王都の連中に
ごちやごちや言われるのが
面倒くさい

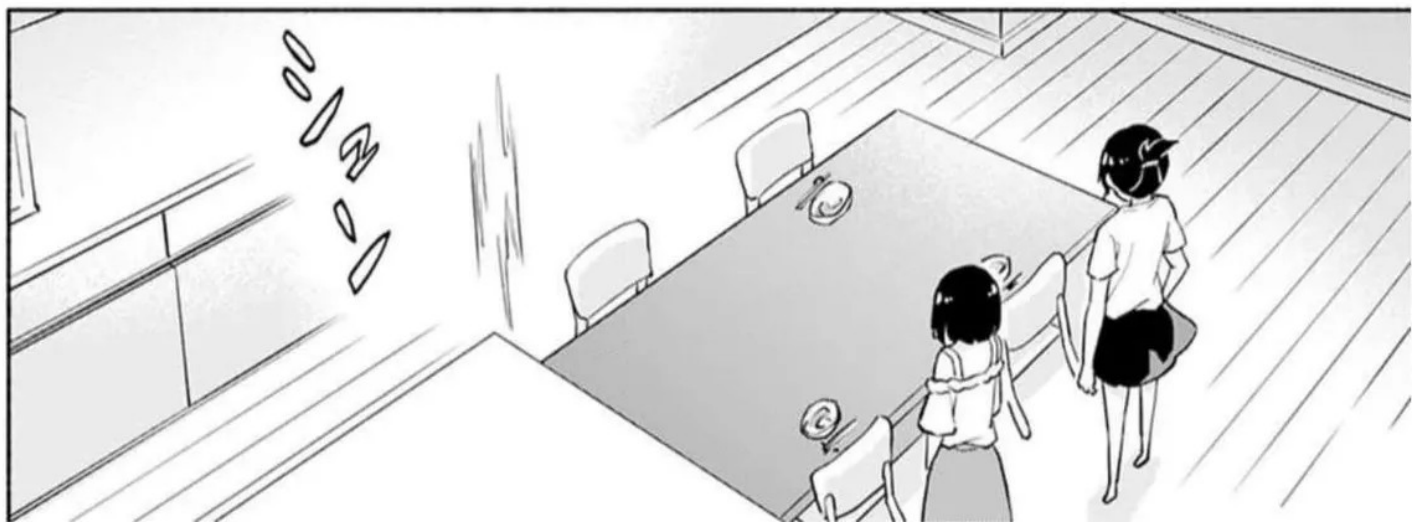


だから
今回の魔物集団暴走の規模を
かなり過小に報告している

そのあたりの
つじつま合わせを
手伝ってくれ

——ということで
大量にいた魔物の痕跡を
隠すために
【無限収納＋】へ
片っ端から収納をな





油が
なじむまで
って何分!?

箸が
スッと通れば
こどれくらい
の
感触!?

適度に!?
軽く!?

いー感じに
アレしといて!?

慣れなさい

最後のは
しーぽに
ないでしよ



FAILURE ? R SUCCESS



メイルグラード

遅くなっちゃった
なあ

マンションに帰っても
ふたりとも寝てる
だろうし…

いつもの宿で
ひと眠りして

朝方
シャワーだけ
浴びに戻るか

あんまり寝心地は
よくないけど
広さだけは
あるからな—

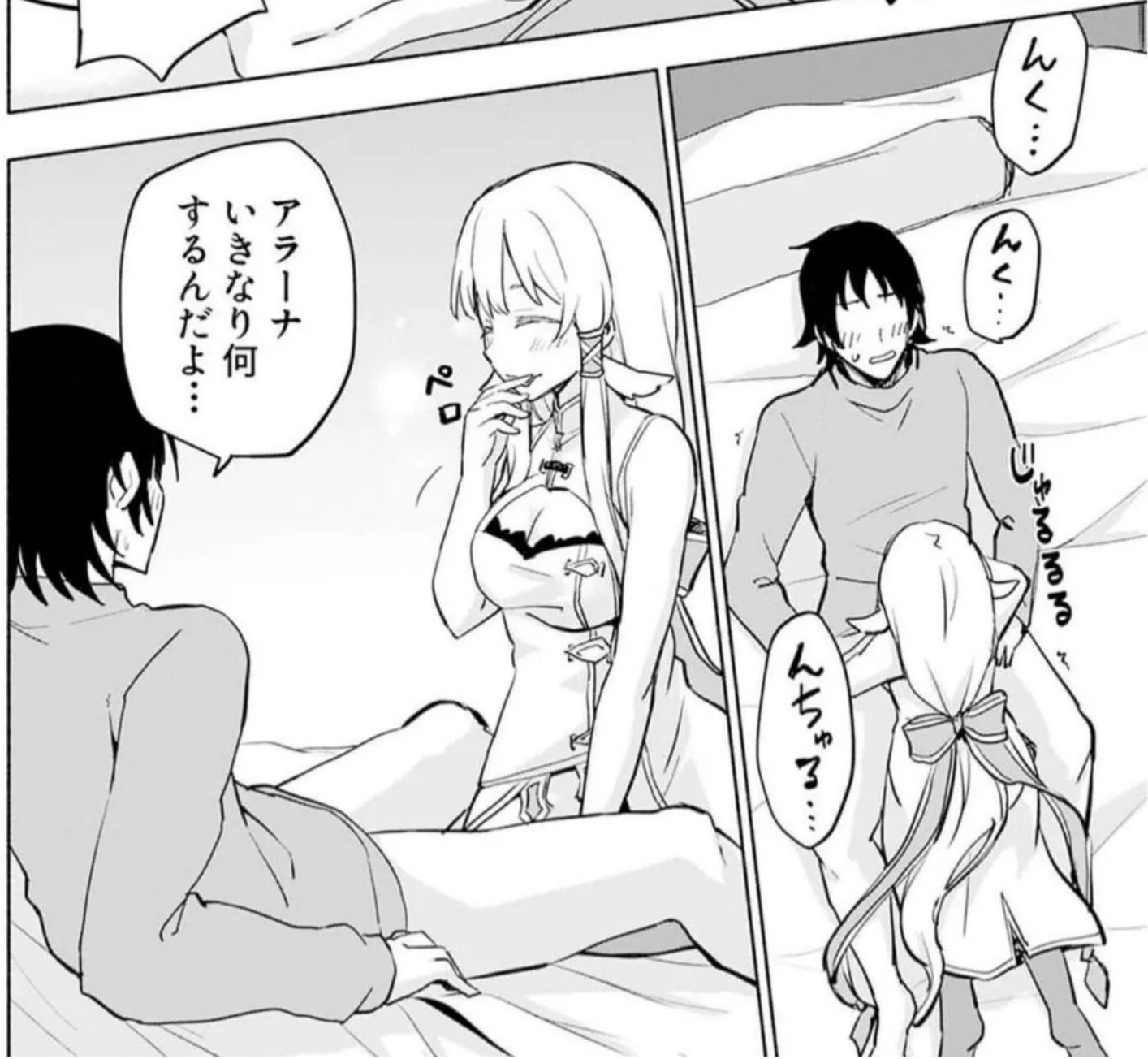
ごろん

ぐー…





ぐっ
もう出る…っ!!



アラリーナ
いきなり何
するんだよ…

んく…

んく…

んく…



















あじゃあ
事後処理もう
終わりなんだ？

うむ
ひとまずはな

で追加の仕事が
湧いてくる前に
逃げてきた

よかったの？

フン
あれ以上働けと
いうのは完全に
父上たちの
甘えだよ

そもそも
私は冒険者
なのだからな

そういう
ヨーチ殿は
どうなのだ？

俺もとりあえず
一段落ついたかな

森の中にも
いろいろあるけど
そっちは後回しで
いいみたいなので

そうか

なら私も一度
あちらに
帰っておくか

カリンとミサトの
顔を見たいしな

ふいふ

【無限収納十】！

砦周辺と
森近くの荒野で
ばらまいた銃弾は
全部回収したよ

そうだな

じゃあ
部屋に戻ったら
帰ろうか

まだ明るい時間
だけど今日は
だらだら過ごそう

ふふ
いいな

【帰還十】

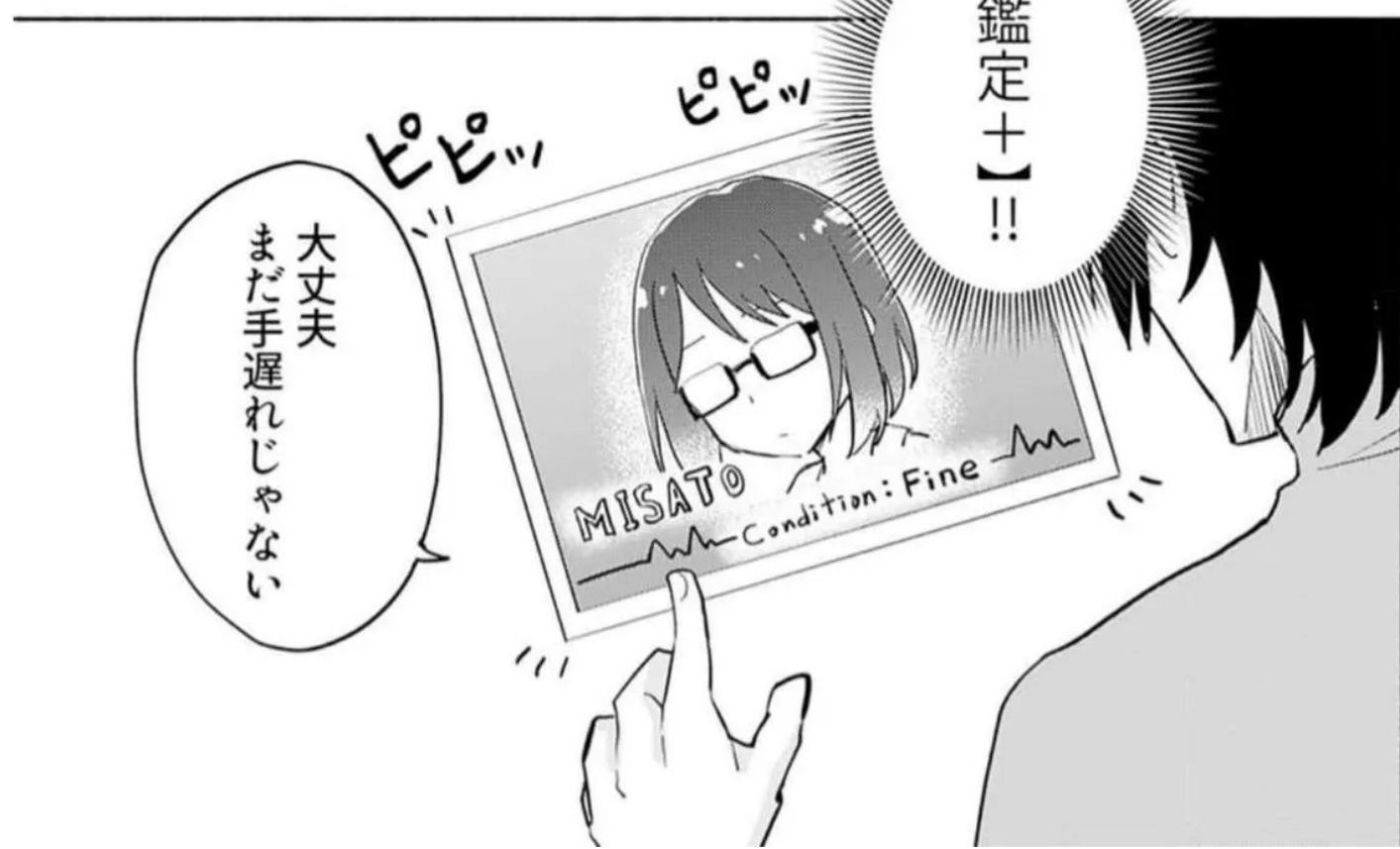
















靴だったら
童話が始まる
ところだったわね

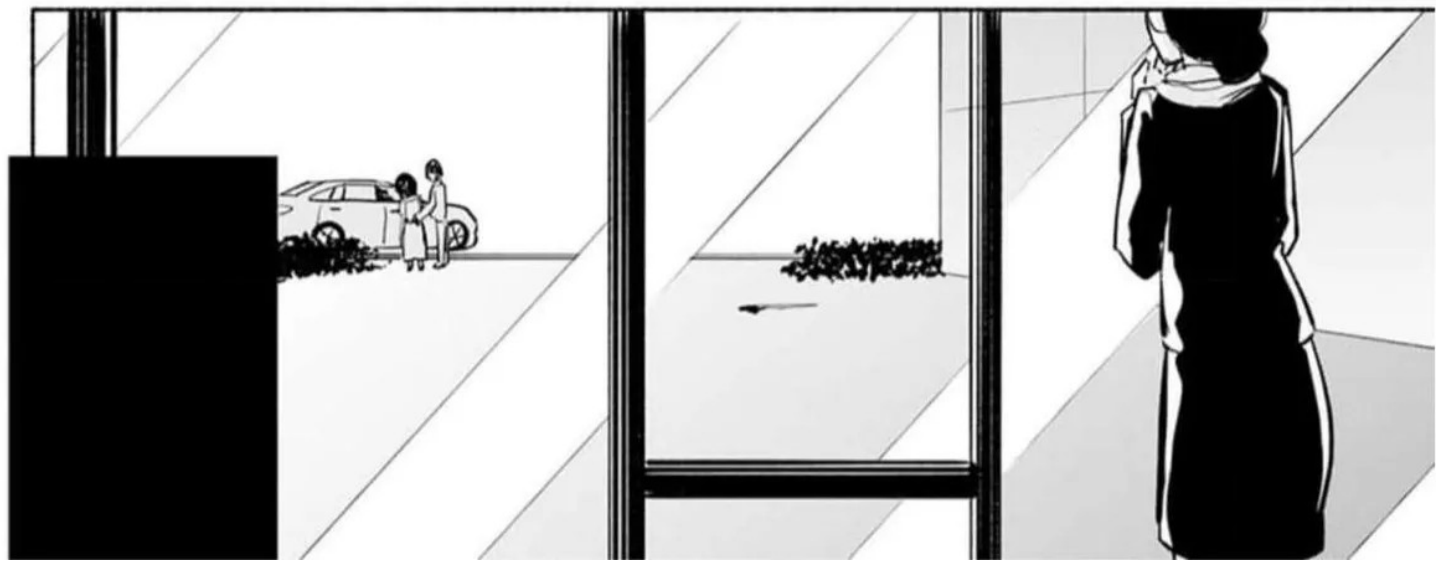
FAILURE ? R SUCCESS











星川グループ本社
第2ビル

地下4階

姉さんにはここに
住んでもらう

ここなら
僕が日本にいる間は
いつでも会いに
これるからね

知らない
番号だな…

着信中

ん
電話か…

実里っ！







…いいのかよ
巻き込んでも

これは僕と
実里の問題だろ？

そいつ僕を…
— 星川グループを
敵に回すことにな
るんだよ？

そう言えば
私が屈すると
思った？

ふふっ

— え？

陽一さんと
会えなくなることに
比べたらそんなの
たいしたことじゃない

いつまでも
あなたの
思いどおりになる
私じゃないんだよ
文也

だだまれえっ!!





忘れる？
陽一さんを？

あなたの
下手くそな
セックスで？



はっはは…

そうだ実里
愛し合おう！

そうすれば
アイツのことなんて
一発で忘れられるさ！



へ下手くそ…!!



なにを
言ってるんだ
姉さん!?

いつも僕に抱かれて
気持ちよさそうに
してたじゃないか!!

あれは
身体が反応
してただけ

気持ちいいの
とは違う



私ね

陽一さんに抱かれて
初めてイッたの

え…？

心が震えるほど
感じられたのは
陽一さんだけ

あなたじゃない

そんな…姉さん
あいつと寝たのか…？

ヨロ…



だから
なにをされようと
陽一さんを
忘れるなんてない



絶対に
ありえない



…いえ
あれはその



瀬場
あれを



…もういい

いいから出せよっ!!







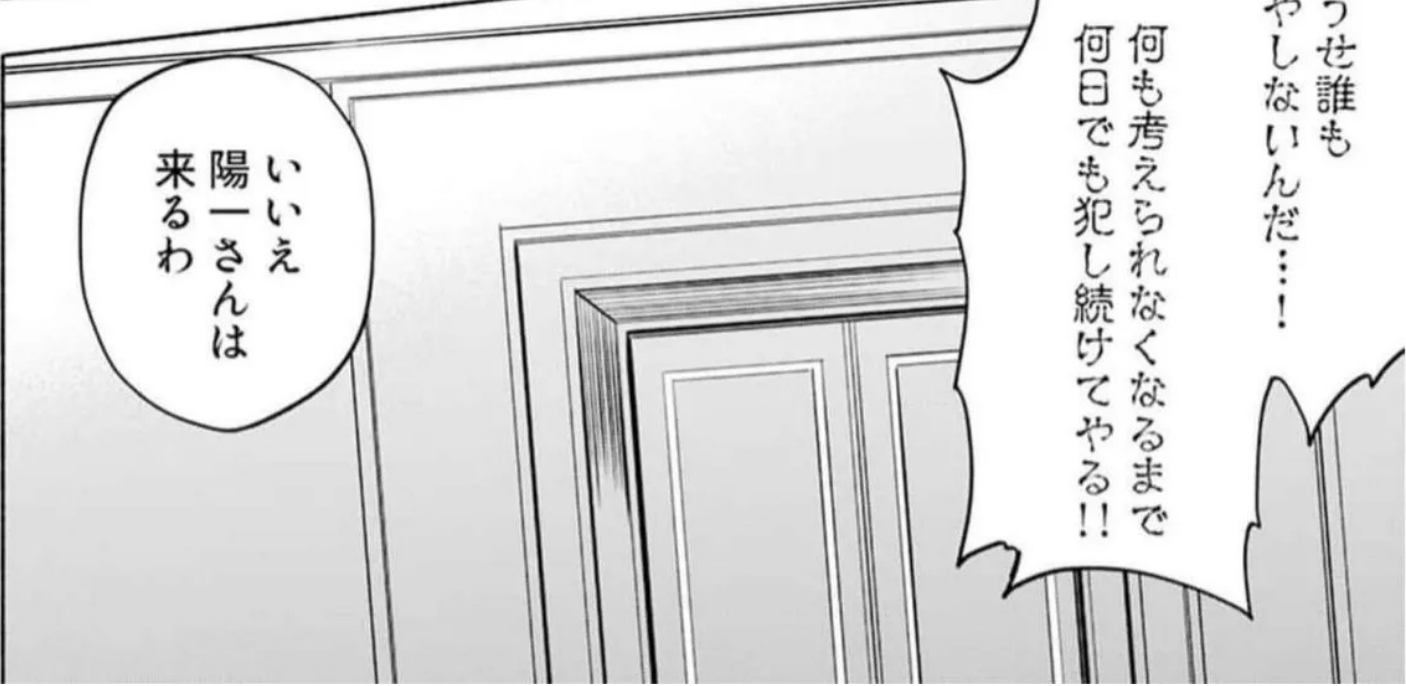
離れていても

私と陽一さんは
繋がってるから



ふざけやがってえ…!!

犯してやる…!!

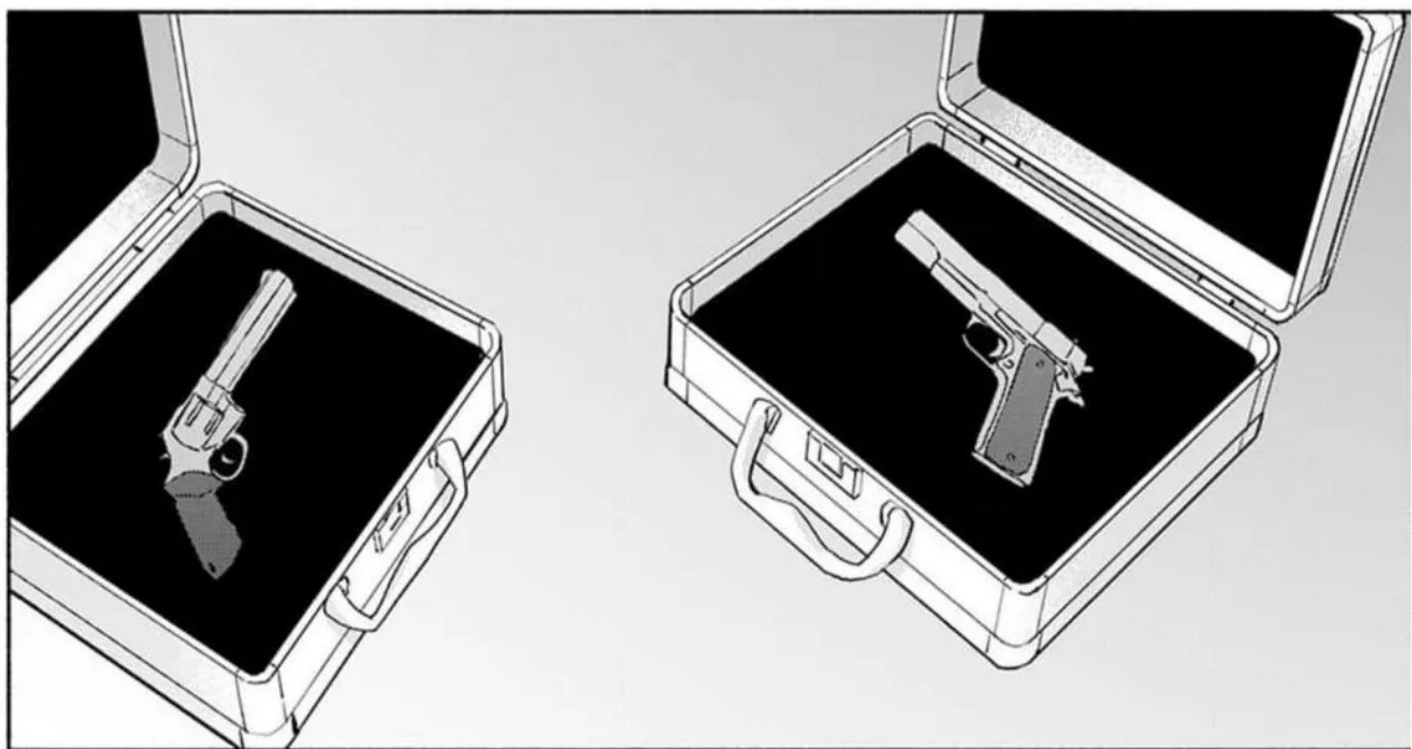


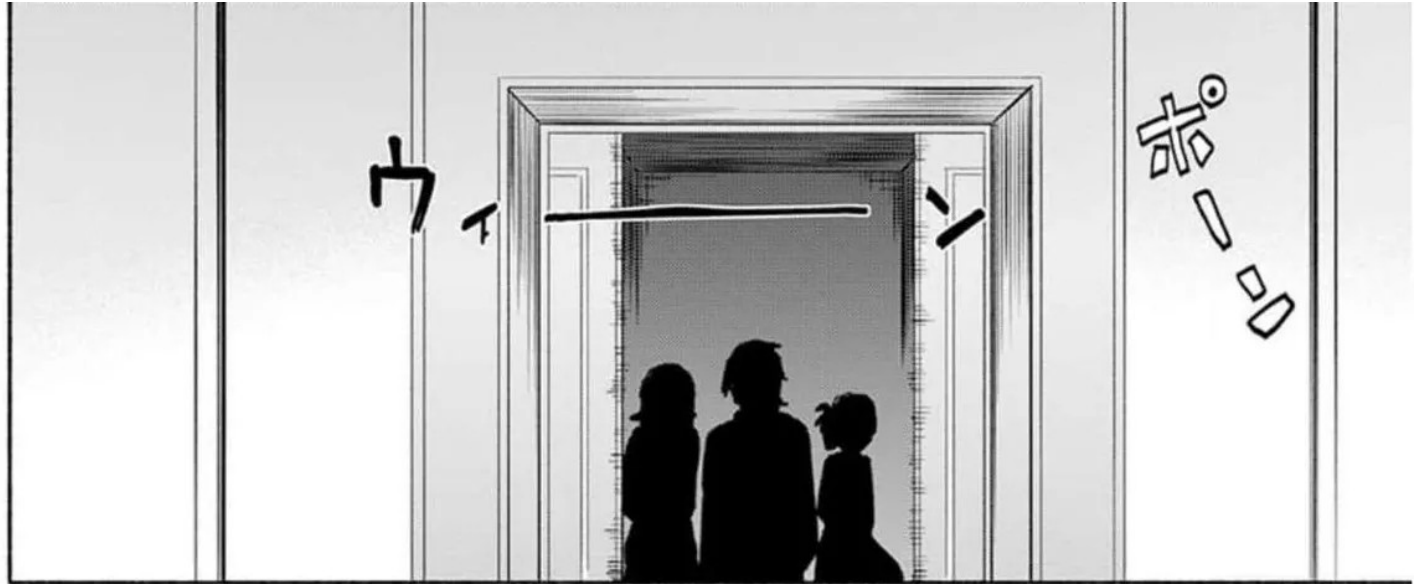
どうせ誰も
来やしないんだ…!

何も考えられなくなるまで
何日でも犯し続けてやる!!

いいえ
陽一さんは
来るわ







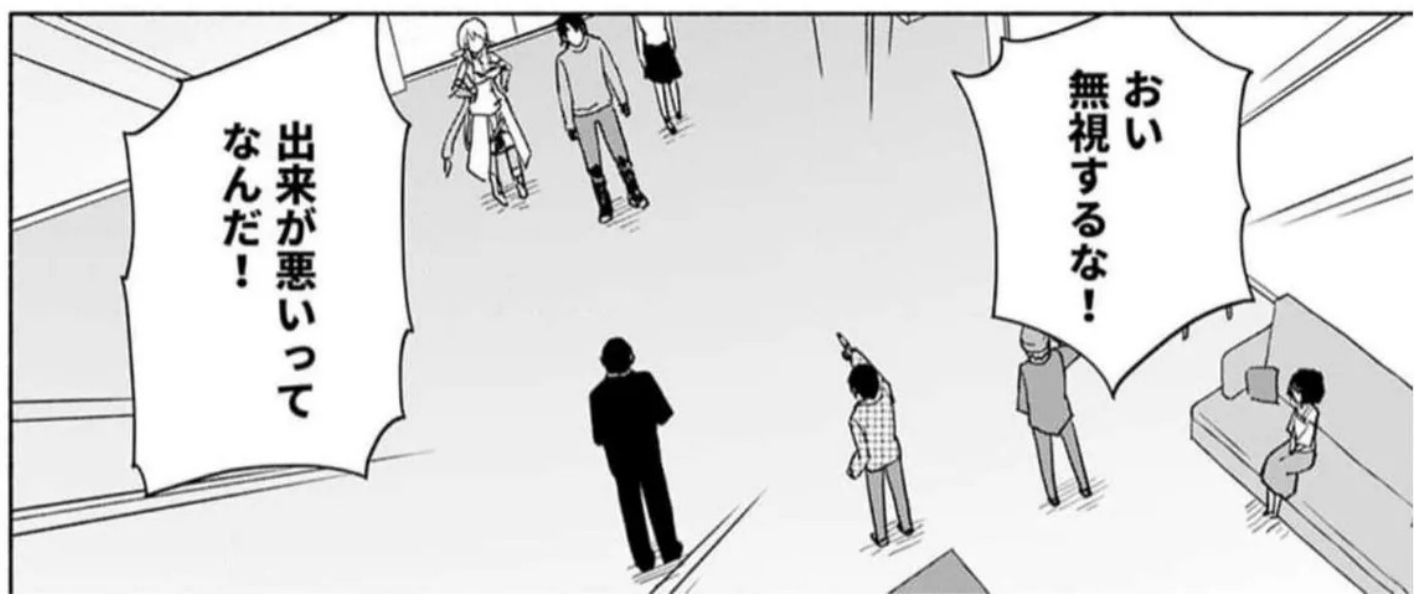
吉田くん
実は話に
出てました



FAILURE ? R SUCCESS









お前^めえ状況
わかってんのか？

悪いこと
言わねえから
さっさと帰れよ

なあ？



おいおい
おっさんよお



状況ねえ…



お前^めらこそ
そんなおもちゃで
なにがしたいの？

おもちゃ？
これが？

あはははは!!

平和ボケの日本人には
本物とおもちやの
区別なんて
つかないかあ





もう1回
聞くけど



そんなおもちやで
なにがしたいの？

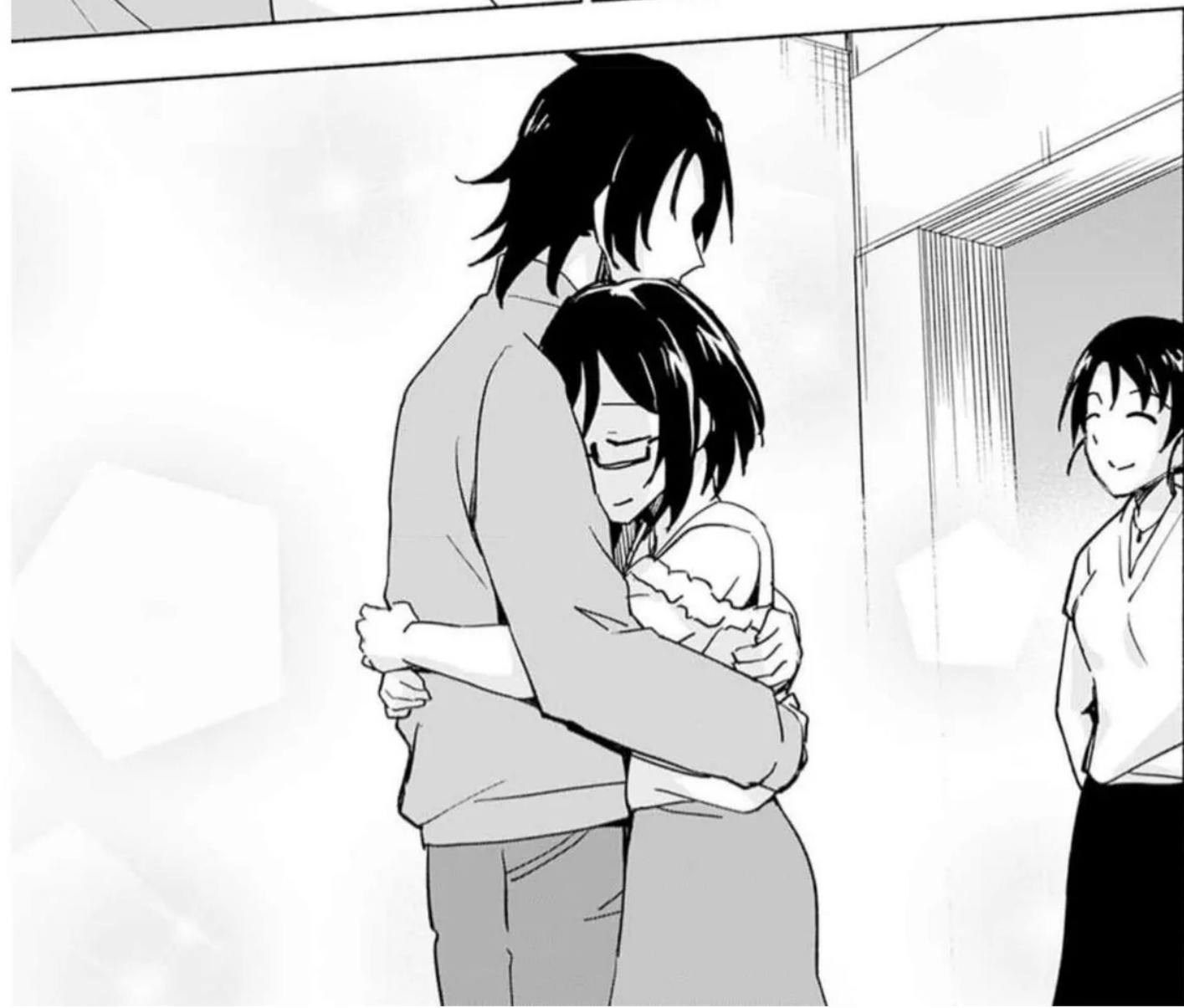
トトトイ

サッ











…実里はここ
嫌じゃない？

大丈夫です

すぐに
陽一さんたちが
来てくれましたし

それに…

せっかく文也が
私のために用意して
くれたんですから
使ってあげようと
思うんです

陽一さんと

はは

そっか
じゃあ遠慮する
必要はないか

はい

陽一さん…

実里…



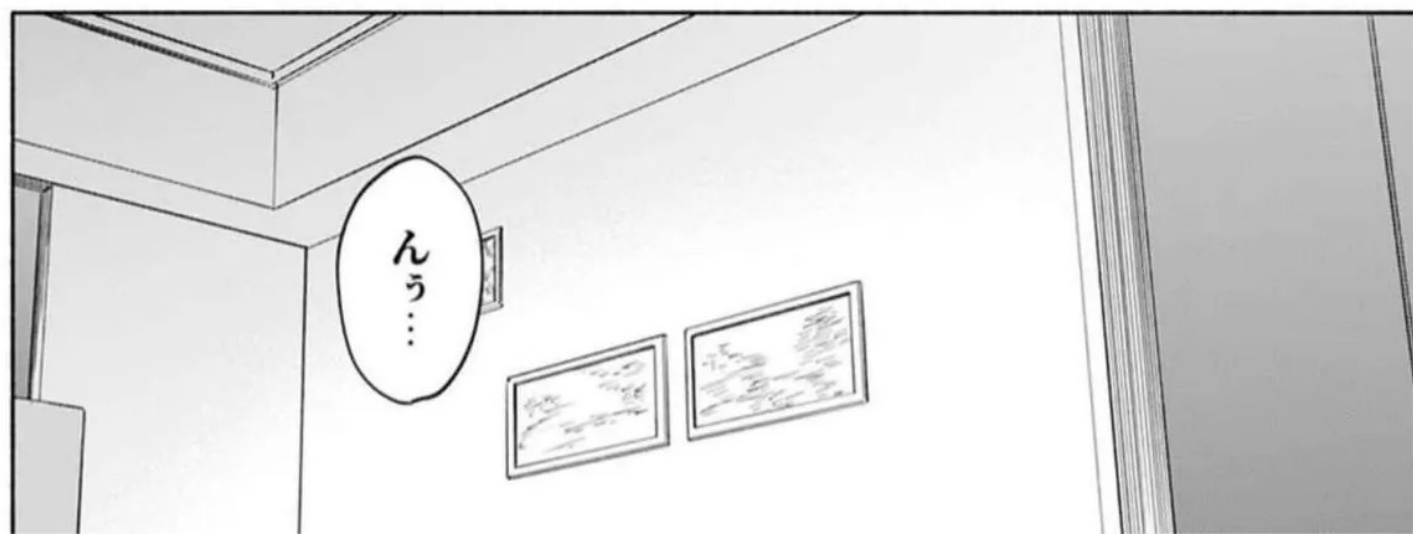
















残念だったな
私だよ

おお前…

がちゃ

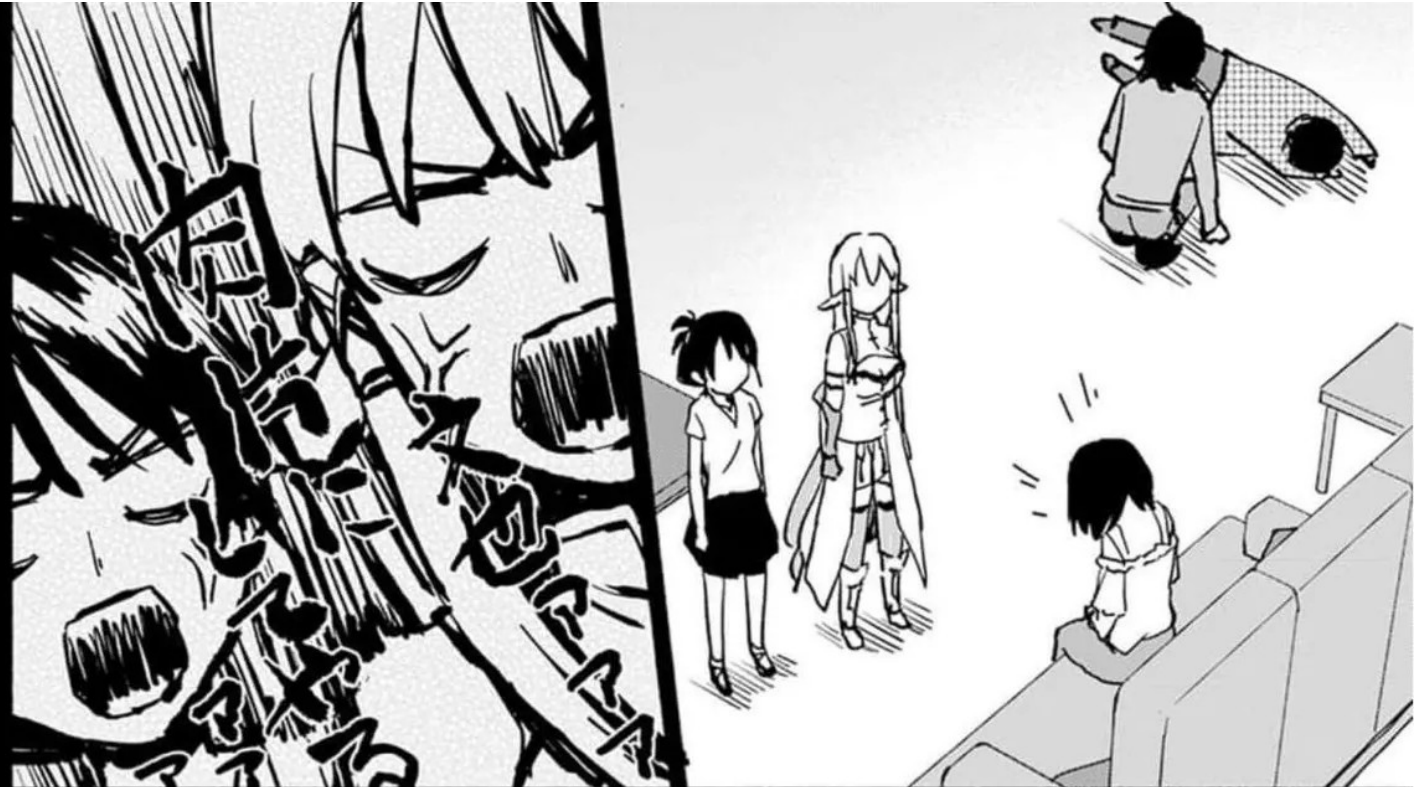
おお!!

おお前!
僕にこんなことをして
ただで済むと
思っているのか!?

貴様のほうこそ
ただで済むと
思っているのか?

な…
なんだと…?

聞いたぞ貴様が…
私の仲間になにを
してきたのかをな



僕と姉さんは
愛し合っているんだ!!

愛し合う者同士が
同じ時間をすごし
身体を重ねて
なにが悪い!?

ああ聞いたぞ
そういうのを
「すとおかあ」
と言うらしいな

ストーカー……
だと……!?

ふざけるなあ!!

僕を……
僕をそんなものと
一緒にするなあ!!

くくく……

さて
それでは
連れていってやろう





FAILURE ? R SUCCESS



翌日



で
弟くんは
どんな感じ?



ああ
しばらくカトリヌの
ところで働くことにな
ったんだが――

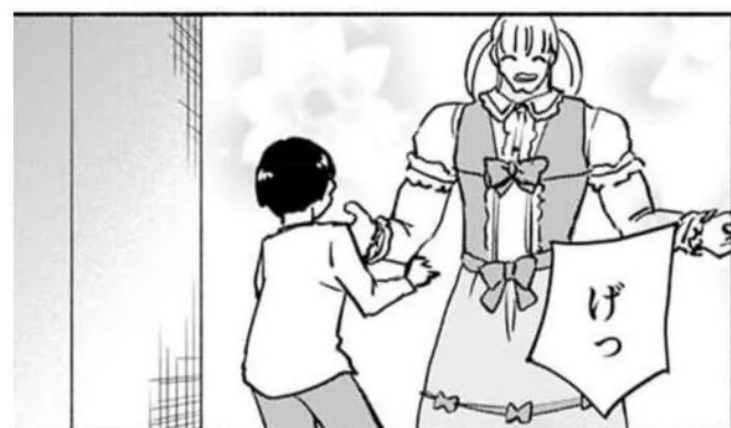






いいぞ
吉田君

今のうちに
ここから逃げ



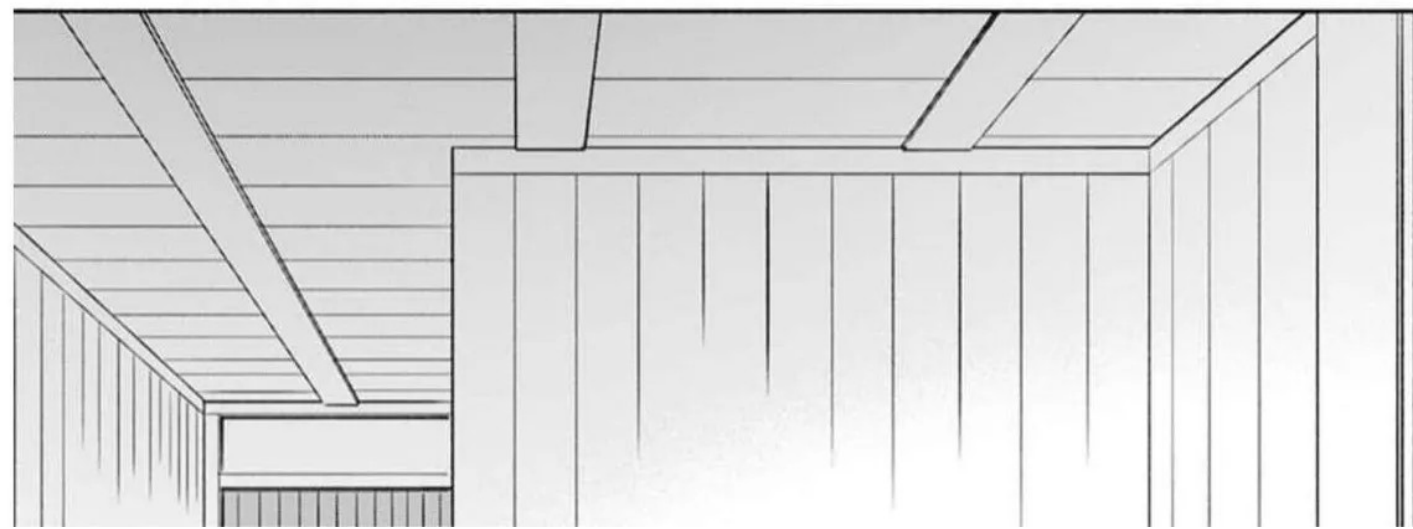
もっと
背筋を伸ばすう!



さあ脚に
力を入れてえ

























文也の実里への
愛情は歪んで
いるものの深く



短期間では執着を
取り除くことは
できなかったそう

でも
ある程度は
矯正したから

今後
みんなに対して
害をなすことは
ないと思うわあ

そうか
それはなによりだ

ただねえ…



どおしても謝罪だけは
したいって言うててえ





3日後



社長室

みなさま
その節は
大変ご迷惑を
おかけしました

ド

ニ

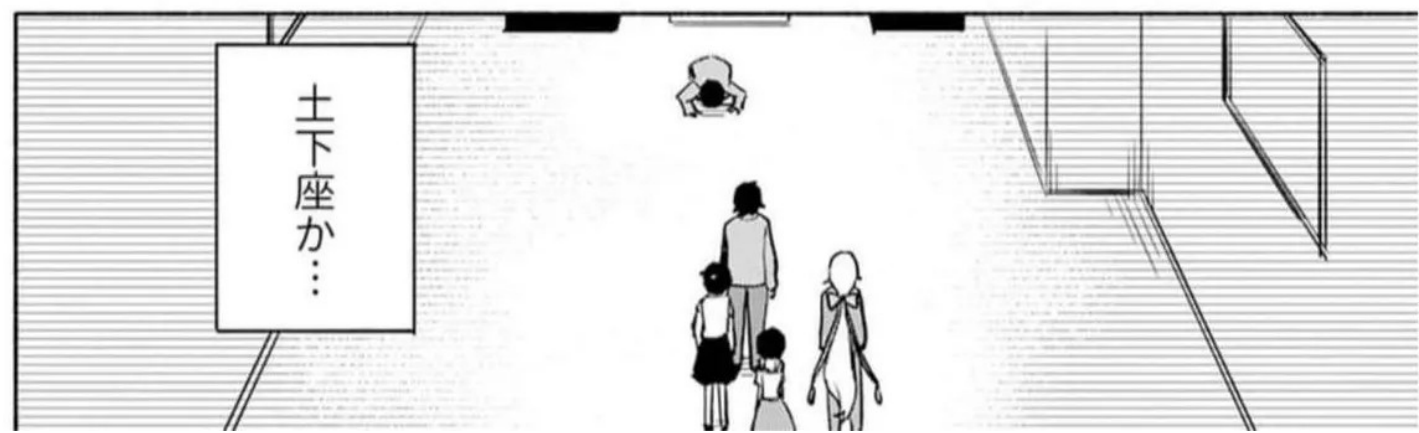
ぶほっ!?

ええ…

お仕置きの
一環なのか…?

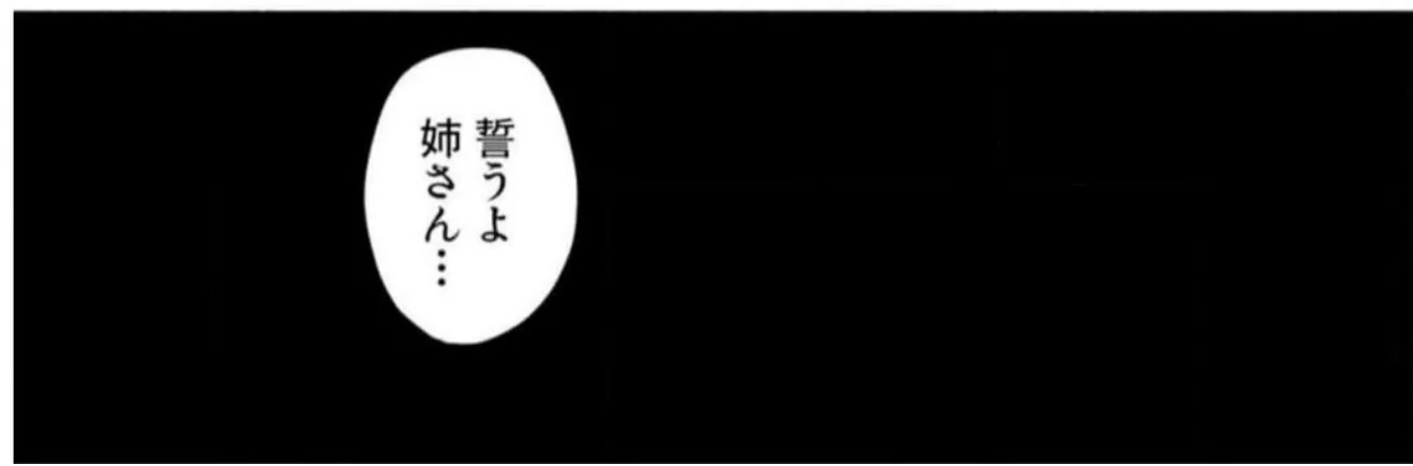
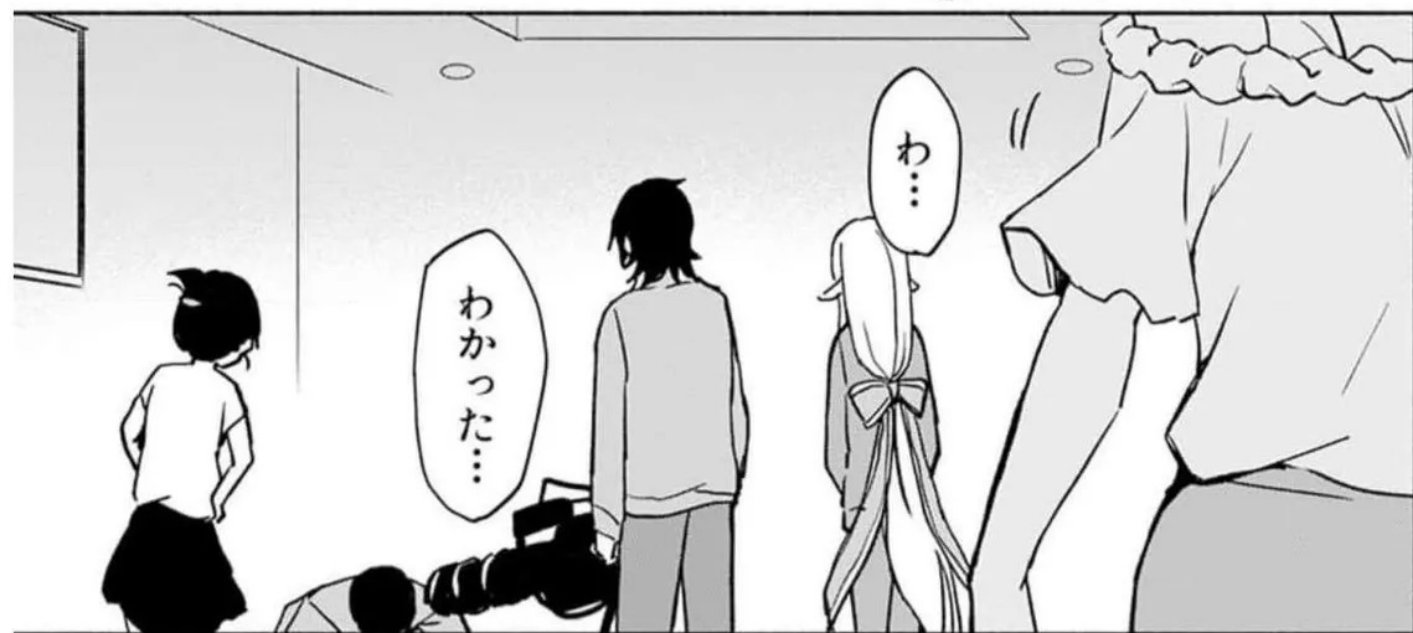
おっさんの
メイド服…
ありかも…

ヤシャッ







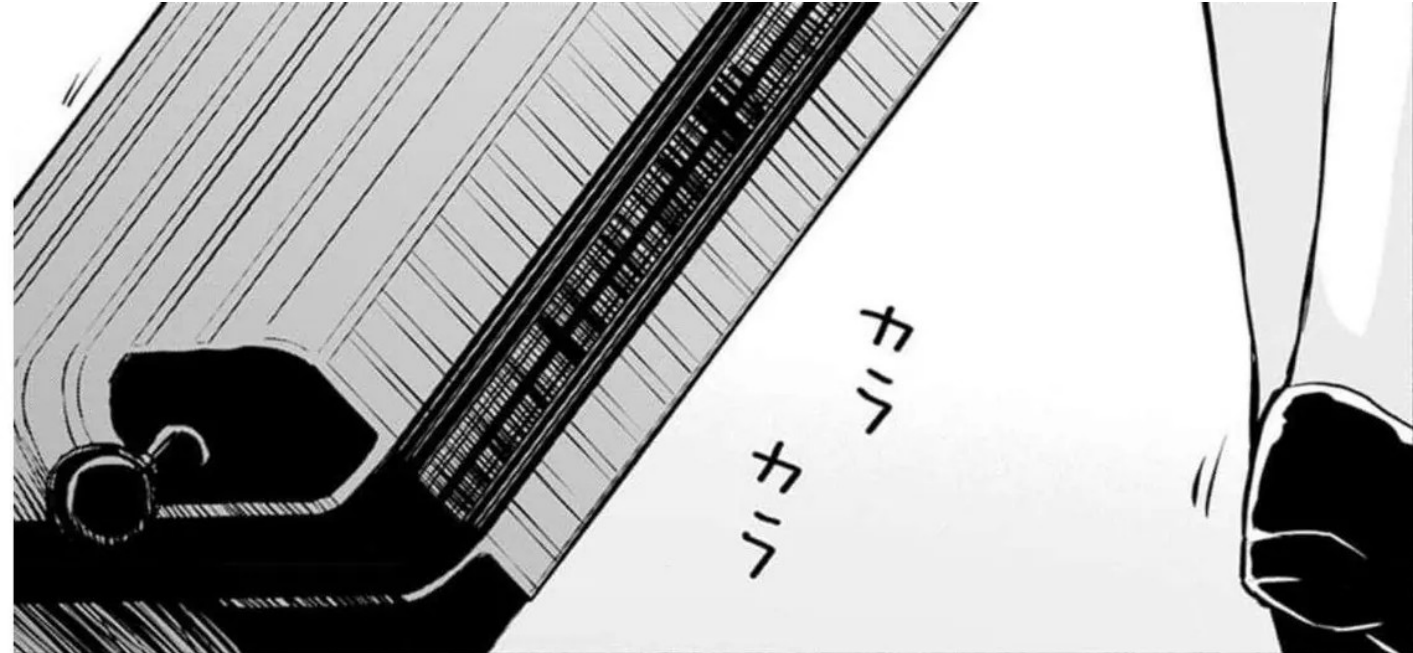






FAILURE ? R SUCCESS









実里の義父と
実母に対して
思うところはあるけど

でも
当の実里が
ふたりになんの不満も
抱いていないのなら

俺がどうこう言う
ことではないか…



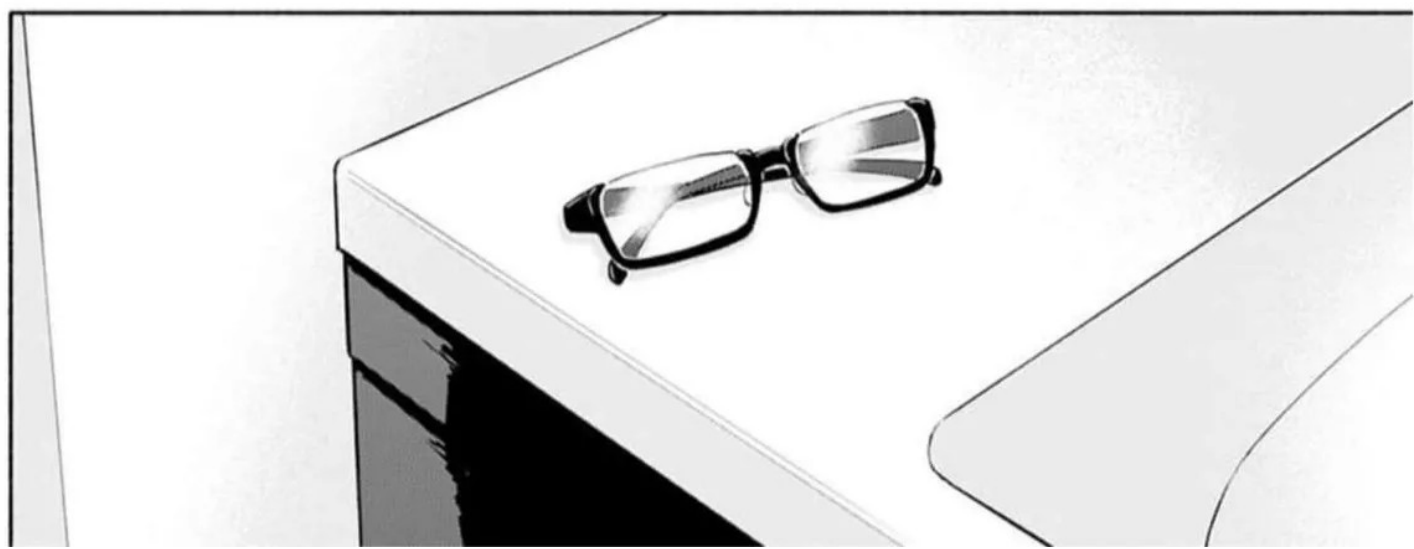
あの
陽一さん

今回は
本当にご迷惑を
おかけしました

いやいや
俺は…























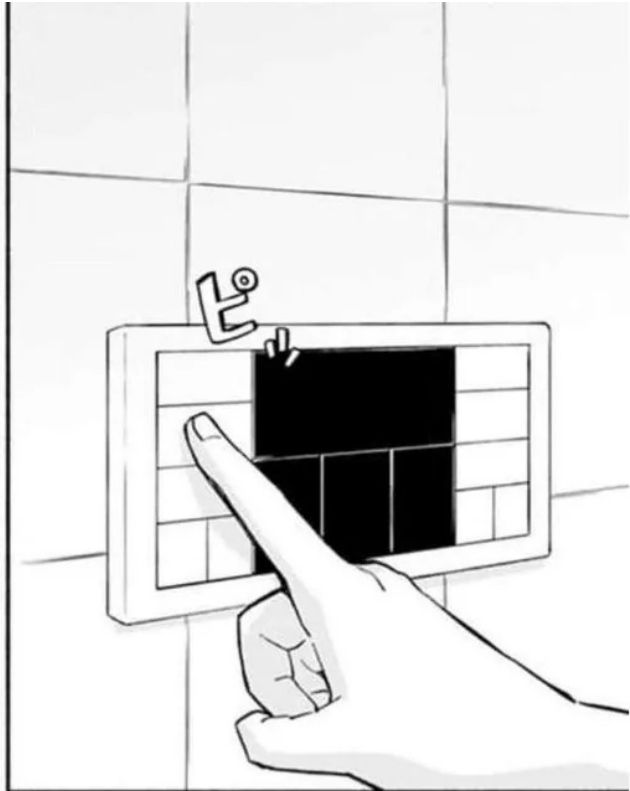














あ と が き

お読みいただき
ありがとうございます。

おかげさまで5巻まで
続けることができました。

現在取材みたいなことは
できていないんですが、
小物類は現物を手に入れて
描く時の参考にしています。
肉じゃがは自分で作りました。
美味しかったです。

それではまた
6巻でお会いしましょう。

うまーい

氷野広真



えっ、失敗!?
転移×成功?

5巻描き下ろし
おまけ漫画

私も
実里さんの肉じゃが
食べたいですー!

愛情がこもった
料理は
それはもう
美味しくなると
聞きますからね

でも実里さんを
ここに呼ぶ
わけにも
いきませんし…

あつ
そうだ

作ったやつを
藤の堂さんに
持ってきて
もらいましょ

そのために
ちよいと小細工を—



さーて
次は何作ろっか
実里

うーん…
満漢全席…

無理よ

肉じゃが…

ヨロ…

俺は肉じゃが
なんだ…

なんで自分を
見失ってんの？

花梨！
もしかしたら
陽一さんは
また肉じゃがが
食べたいのかも
しれない…！

もしかするも何も
ほかの解釈は
無理じゃない？

陽一！
さん！



わかったわ実里
好きなように
やんなさい

うん！

じゃあまずは
シュークリームを

ちよつと待って

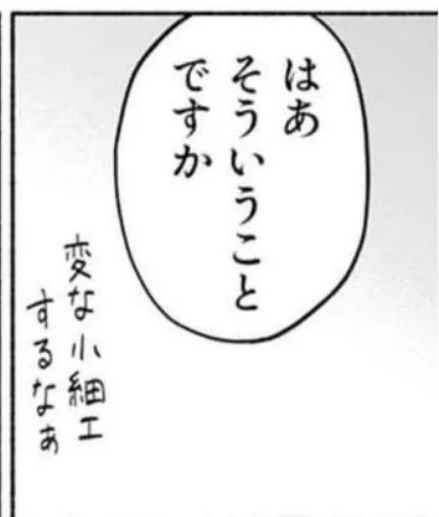
さあ
陽一さん
めしあがれ

食べられる
程度には調え
られたわ！

なんとか

ありがとう
いただきまー





いただきます！

もぐもぐ

ん

んん!?

びゅっ

ん!?

あれ…
なんか
あんまり…
ですねえ…

おかしいな
前はすげえ
美味かった
のに…

実里さんの愛情
冷めちゃったん
ですね——!!

なんてこと
言うんだ
この人は!!

えっ、失敗!?
転移.....成功? **5**

特典

ほーち先生書き下ろし SS

『グランコート2503』のリビングにて、陽一と花梨は並んで座り、談笑していた。

陽一はいつもの作業着で、花梨はゆったりとしたルームウェアで身を包んでいる。

「ねえ……」

会話が少し途切れたタイミングで、花梨は陽一に身を預ける。

「いしたら、どうなるのかな……？」

「どうって？」

「すぐに回復するとか、さ」

「んー、それはないみたいだ」

「そっか。じゃあ、普通のセックスになっちゃうわけね」

「……だな」

しばらく無言で見つめ合ったあと、ふたりの唇が重なる。

「あむ……れる……んちゆる……」

互いの身体に腕を回し、まさぐり合いながらの激しいキスが続いた。

舌を絡ませつつ、陽一は花梨の胸をまさぐる。

「んう……あんっ……あっ……!」

乳房を触ると、花梨は身を反らして喘いだ。

「おねがい、脱がせて……」

しばらく前戯を続けたところで、瞳を潤ませた花梨が訴える。

「了解」

普通に脱がせるのが面倒だと思った陽一は、花梨が着ているジャージのズボンや下着などを【無限収納+】に収めた。

「ふふ……やっぱそれ、便利よね」

赤いジャージの上を羽織っただけの、ほぼ全裸に近い格好

となつた花梨が、艶やかに微笑む。

しばらくシャワーも浴びていなかったせいか、花梨の下半身を覆うものがなくなつた瞬間、あたりに甘酸っぱい匂いがむわつと広がつた。

匂いの元へと視線を落とすと、愛液に濡れた恥毛が見えた。陽一は片手で乳房をもてあそびながら、もう片方の手をなにもものにも覆われていない股間へと伸ばす。

花梨の陰毛についた愛液が陽一の手ひらをべちよりと濡らすのを感じながら、秘部を指で覆う。

「んあ……」

とろとろに濡れた割れ目に指を当て、中指だけをクイッと曲げると、つぷりと粘膜に飲み込まれてゆく。

「あっ……んう……ああっ……!!」

第二関節あたりまでを肉壺に埋めたところで、さらに手首を返して根本まで入れる。

そこで指を軽く曲げ、内側の少しザラザラとした部分に指を立てると、少し強めに押さえながらぐりぐりゆぐりゆとこすった。

すっかりほぐれた花梨の状態を確認したためか、すでに怒張していた陽一のイチモツが大きく脈打つ。

「ん……いいよ……」

そんな彼の様子を察した花梨が優しく告げた。

陽一は自身の服も【無限収納＋】に収めて全裸になり、先端から透明な汁を出していきり勃つ陰茎の位置を調整する。

「あ……」

にちゃ……という音とともに、先端が秘部に触れるのを確認した陽一は、そのままゆっくりと腰を押し出した。

「んう……はいっ……たあ……」

まだ体調が万全ではない花梨を気づかいながら、陽一はゆつくりと腰を動かす。

ぬちゅ……ぬちゅ……と粘膜同士がゆつくりこすれ、花梨の口から荒い息と低く小さな喘ぎが漏れる。

「んう……はんっ……あう……んん……」

ときおり【鑑定十】が示す弱点を軽くこすりながら、ゆつくりと交わった。

そうやって体位を変えずに1時間以上、単調な動きを繰り返す。

「はあ……よう、いち……やば……なんか……」

「くう……！ おれも……」

ゆつくりと同じ動きを繰り返す交接には終わりがないうよう

に思えたが、快感は少しずつ積み上がっていき、ふたりは大きな波がくるのを予感した。

身体の中からぞわぞわと湧き上がってくる感覚が強まるにつれ、陽一の背中に回した花梨の腕に力が入る。

「よう……いちい……なんか、こわいよ……ぎゅって、してえ……！」

花梨に乞われ、陽一も彼女を強く抱きしめた。

長時間触れあい、汗まみれになって熱を持った肌がさらに強く押しつけられ、密着した胸からは早くなっっていく互いの鼓動が伝わる。

それでも陽一は腰を動かすペースを上げず、ゆっくりと、単調に、同じ動きを繰り返した。

「あ……あ……あ……!!」

ほとんど声にならない喘ぎ声を発する花梨の身体が、腕の中でこわばっていくのがわかった。

それと同時に彼女の膣がきゅうつと締まり、異物を内側へ誘うように激しく蠕動ぜんどうを始める。

身体の奥底から湧き上がっていた感覚はやがて快楽の奔流となり、ふたりに襲いかかった。

「あ——!!」

「うぐあ——!!」

——どぷん……………!! どびゆるっ!! びゆるるっ!! びゆるるるーっ!!

堰せきを切ったように放出された精液が、花梨の膣奥を襲う。

陰茎の脈動は1回1回がいつもより大きく、先端から飛び出る精液の勢いはいつもより強い。

腕の中で身を反らして硬直する花梨は、痙攣しながらぱくぱくと口を開閉させていたが、結局声は出せず、やがて全身を弛緩^{しかん}させて意識を失った。



「いやあ、今日も今日とてお盛んですなあ」

下界を見下ろしながら、藤色の着物に身を包んだ女性が呆れたように呟く。

その女性、「管理者」は、いつものように陽一らの様子を観察していた。

魔物集団暴走を見事に終息へと導いた陽一たちだったが、陽一は魔人の手にかかって死にかけたし、無理をした花梨と実里は体調を崩した。

そのため花梨と実里は現在、地球に戻って休養。自身の未熟を悟った陽一は、アラーナの祖父・セレスタンの手ほどきを受け、修行を始めた。

そんな状況にありながらも、隙あらばセックスをしようとするのはさすがと言うべきか。

「まあ、藤の堂さんらしいっちゃらしいんですがねえ」

陽一だけでなく、そのまわりにいる女性陣も随分たくましいようだ。



「おや、今日は女性おふたりでお出かけですかね？」

その日、管理者は、地球で休養中の花梨と実里を観察していた。

陽一のために料理を振る舞おうとしたふたりだったが、彼の部屋に食材や調味料、調理道具がないため、それらを買に出かけるようだ。

「おや。おふたりさん尾行されてらっしやる？」

ディスカウントショップで買い物をしている花梨たちのあとを、ひとりの青年がつけているようだった。

「あのニット帽、どこかで見たような……？」

管理者は、そのいかにもチャラい大学生といった風貌の青

年に見覚えがあつた。

「ちよいと失礼しますね〜」

管理者としての権限を使つて、青年の素性を調べる。

「えつと、名前は……吉田誠さん？　うわあ……なかなか香ばしい経歴の持ち主ですねえ」

その吉田誠という青年は、少し前まで大学生だつた。

通つていたのはあまり偏差値が高くない大学で、彼はいわゆるヤリサーというものに所属し、多くの女性を食い物にしていたらしい。

そんな彼と陽一には、意外な接点があつた。

「あー、あの宝くじのときの」

スキルを手に入れたばかりのころ、陽一が【鑑定＋】を使つて宝くじの当たりを引いた際、因縁をつけて陽一を襲おうと

した3人組のひとりだった。

「なんとまあ、あれをきっかけにこのかた、大変なことになったんですねえ」



あるとき陽一は、【帰還十】を使って自宅に転移し、難を逃れた。

誠たちからすれば、追い詰めたはずのおっさんが突然消えたことになる。

「な……なにを言っているのかわからねーとおもうが――」
「あー、はいはい」

誠はその日の体験をサークルの仲間にしたのだが、まる

で信じてもらえなかった。

「いやマジなんだって!! 催眠術だとか超スピードだとか——」
「だからもういいってその話は」

正確には興味を持たれていないだけで、聞き手にとって彼の話が事実かどうかはどうでもいいのだが、誠はその仲間の態度が気に食わなかった。

その後も別のサークル仲間やバイト先の先輩、後輩を相手に同じ話をしてみたが、消えたのが美少女ならともかく、おっさんがひとりいなくなったことに興味を持つ者はいなかった。

「ちつくしよー、ホントなんだけどなあ」

そう思い、SNSのタイムラインにもしつこく体験談を流していた。

『つてかなんでおっさんのあとつけてたの？』

きっかけはひとつのリプライだった。

『あー、こいつバイトの後輩かも。なんかパチで負けた腹いせに親父狩りしようとしてたとか熱弁してたわwww』

『うわなにそれさいあく』

『コイツどこ中ちゅうよー？』

『たしか——大だいつつつてたかな』

『いや、先輩ガチで答えんなしwww』

『おおっとコンプライアンスうー？ あやうくテニサーつてこ
とまで喋喋っちゃうところだったぜえ』

『コンプライアンス仕事しろwww』

『ん？ ——大のテニサーつてあれじゃね？』

『あれつてなによ？』

『ヤリサー的な？』

『まじかよそれ爆発しろ！』

『そういや連れの従姉妹がそこでなんかされたって……』

『俺が入る前に辞めたバイトの先輩も——大のテニサーでなんか訳ありだったって噂が……』

『そういやオカンのパート先の知り合いの娘さん、——大の新歓終わってすぐ大学やめてひきこもってるとか……』

誠のSNSが炎上した。

そこには誠の個人情報からサークルの悪事——あることないこと——を晒す書き込みが多くあった。

それを見た一部のユーザーから、警察やら大学やらに通報が入る。

誠のいたサークルの手口はじつに巧妙で、普通であれば問

題が表沙汰になることはなかった。

何年か前によその大学の学生が作り上げたものらしく、先輩からシステムの説明を聞いたとき、誠は大いに感心したものだった。

今回も被害届などが出されたわけではないため警察が動く気配はないが、ここまでことが大きくなると隠蔽は難しい。

サークルは解散となり、責任者にはそれなりの処罰がくだされると予想された。

そして誠は、先輩たちから無理矢理サークルの会長職を押しつけられ、責任のすべてを負わされることになる。

結果、彼は大学を除籍処分となった。



「くそ……全部あのおっさんのせいだ……」

誠は陽一に対して、恨みの矛先を向けていた。

そうでもしないとやっていられないのだろう。

「とりあえず、一発当てて厄落とししとかないと……」

その日、誠は場外馬券売り場へ向かうため電車に乗っていた。

「にしてもあのおっさん、腹立つぜ……あいつさえいなけりや

……あの作業服のおっさんさ……え……？　んん？」

ふと向かいの席を見てみると、見覚えのある服装が目に入っ
た。

「作業服……？」

そしてじつと顔を見てみると、それがあるとき消えた男で
あることに気づいたのだった。

（つつか、なんでいままで気づかなかった？）

恨みを持つ相手である。

もう一度見ればすぐにわかると思っていたし、もし見つけたら2、3発殴って金を出させようと思っていた。

なにせ誠は、その男のせい——明らかに自業自得だが——で大学を除籍され、いまや仕送りすらしてもらえなくなったのだから。

その恨みの対象たる作業服男が、向かいのシートに座っている。

（いつから乗ってた？ いや、まあいい……）

誠はポケットからスマートフォンを取り出し、相手に悟られないように男の顔をカメラで捉えて、何枚か画像を保存した。

幸い男は誠と同じ駅で降りるようなので、あとをつけるこ

とにする。

「くそっ……どこ行きやがった!？」

だが一瞬目を離れたスキに、誠は作業服の男を見失ってしまった。

それからしばらく経ったある日のこと。

すでに活動を停止していたサークルのグループ宛に、メツセージが届いた。

「探し人？」

探し人と題し、知らない女の簡単なプロフィールが書かれたそのメッセージには、女の顔や写真など数枚の写真が添付されていた。

メガネをかけた地味な女だが、よく見ると結構な美人だ。

「謝礼……1000万!? まじかよ!!」

有力な情報には1000万円の謝礼が支払われると記載されていた。

「……どっかで見たような」

誠はしばらく頭をひねったあと、なんとなくスマートフォンに記録された写真をめくっていった。

「……あつた」

それは先日電車で撮った作業服男の写真であり、その傍らかたわにメガネの女が写っていたのだつた。

「ってか、反対隣の銀髪ねーちゃんクツソ美人じゃねーか!! それにもうひとりの茶髪もツレっぽいし、3人も女連れてるような目立つ連中になんであんとき気づかなかつた……?」

余談ではあるが、作業服男こと陽一、そして同行する女性

陣は、認識阻害の魔道具を身に着けているため、他者から存在を把握されづらくなっている。

だが、認識阻害の魔道具には視覚偽装の効果はないため、カメラなどには捕捉されてしまうのだ。

「あー、いや、いまは1000万が先だ！」

誠は自身が撮った写真のメガネ女だけを残して画像編集アプリでトリミングし、トリミングした写真をグループではなく発信者個人のアカウントへと送った。

『どこで撮った？』

返事がすぐに返ってきたので、場所と日時を伝え、その情報はグループに共有された。

『謝礼を振り込む。口座番号を』

「マジかよ!？」

謝礼に関しては冗談半分だと思っていたのであまり期待していなかったのだが、こうなると現実味が増してくる。

もしかすると新手の詐欺かも知れないが、騙し取られるほどの金もないので誠は素直に口座番号を教えた。

その数分後、ネットバンクから入金を知らせるメールが届いた。

「ま、マジかよ……」

ネットバンクアプリで残高および明細を確認したところ、1000万円が振り込まれていた。

その直後、またメッセージが届いた。

『新たな有力情報には重ねて謝礼を出す。引き続き協力を頼む』
「マジかよおっ!!」

誠は狂喜乱舞した。



「いや、マジかよ……」

数日後、ATMである程度まとまった額の現金を引き下ろした誠は、デイスカウトショップを訪れていた。

少し前までは毎週のように行なわれていた活動がなくなり、誠は鬱憤を溜め込んでいた。

その鬱憤を晴らすべくナンパにでも繰り出そうと思い、ブランドものに身を包めば少しは成功率が上がるだろうということなんとも浅はかな考えから、彼は散財するつもりだったのだ。

そうやって訪れたデイスカウトショップで、ブランド品コーナーへ向かう途中、通りかかった家電コーナーで、誠は瞠目した。

そこには大画面テレビやビデオカメラが並べられており、一部のカメラが撮った映像をモニターに映し出していた。

そしていくつも並べられた大画面テレビのひとつに、メガネの女が映り込んだのだ。

「キてるぜえ……。こりゃとんでもねえビッグウェーブがキてるに違いないぜえっ!!」

炎上騒ぎから除籍に至った不幸分の揺り戻しがきていると考えた誠は、買いものを止めて女のあとをつけた。

どうやら女友達とふたりで買い出しにきているようだった。

あとをつけ始めてすぐにふたりを見失いそうになった誠は、慌ててスマートフォンを起動し、動画撮影を開始した。

万が一見失っても、あとで動画を検証して、せめてふたりの女が向かった先のヒントでも残しておこうという思惑から

だった。

「ん？」

そこで誠は首を傾げた。

見失いかけたふたりだが、カメラを向けたところフレーム内であっさりと捕捉できたのだ。

なにやら不思議に思いながらも、記録は多いほうがいいだろうと思い、誠は動画を撮影しながらふたりのあとをつけた。

（おわつと……!!）

ディスカウントショップを出たあと、道の反対側から尾行していると、突然ターゲットではないほうの少し背の高い女が立ち止まり、あたりを見回し始めた。

茶髪にスーッぽい格好のその女は、明らかにまわりを警戒しているようだった。

「——つぶねえ……」

誠は慌ててスマートフォンをポケットにしまい、なに食わぬ顔で歩きつつその場をやり過ごしていちばん近い角を曲がる。

（頼むぞ……!!）

角を曲がって身を潜め、スマートフォンを取り出し、カメラだけを物陰から出して画面を覗く。

（よしっ!）

なんとかふたりが建物に入る直前から捕捉できた誠は、彼女たちが画面から消えたあと、少し時間をおいて来た道に戻った。

「ふーん『グランコート』ねえ……。高そうなマンションだことで。えっと、〃特定しますた〃 っ」と

そう呟きながらスマートフォンを操作し、GPS情報から住所を確認して短いメッセージとともに位置情報を貼りつけて送信した。

誠の口座にはさらに1000万円が振り込まれた。

その際、張り込みを頼まれたので、ふたつ返事で了承した。

「やあ、お待たせ」

張り込みを開始してしばらく経つと、その男が現われた。

「吉田くんだったね。ごくろうさん」

「いえ、こちらこそ、その……ありがとうございます」

誠の近くに停まった黒塗りの高級車から降りてきたのは、ふたりの男性だった。

ひとりには背が高く口ひげの似合う壮年の男で、もうひとり

は少し背の低い——160センチ台後半といったところか——
若い優男やさおとこだった。



「ははあ……ここであのときの因縁がこうつながりますかあ」
誠らの様子を見ていた管理者は、感心と呆れが半々になっ
たような表情で呟く。

「まったく、藤の堂さんは退屈させてくれませんねえ」
管理者は苦笑を浮かべながら肩をすくめ、小さく首を横に
振った。

ほんの数分関わっただけで、陽一は存在をすでに忘れ去っ
たであろう青年。

『姉さん!!』

『あ……あ……なん、で……?』

そんな青年が、実里のもとへ実里の義弟を招いてしまった。

『やだっ! 離してっ!』

望まぬ再会により、実里は義弟に連れ去られてしまう。

「まあ、藤の堂さんならあっさり解決しちゃうんでしようけどねえ」

管理者は興味深げな笑みを浮かべてそう言いながら、下界の観察を続けるのだった。